

## 前号からのつづき

健康・福祉

「高齢者無償で送迎 吉田町が移動支援事業」 「家族の負担減らしたい 吉田町移動支援スタート」と見出しのついた記事が11月19日付の静岡新聞と中日新聞の朝刊に載りました。

先月号でお話ししましたが、社会の高齢化の進行によって在宅独り暮らし高齢者の世帯や高齢者だけの世帯が確実に増加します。何も手を打たなければ、高齢者の閉じこもりや引きこもりが増えることは間違いありません。社会の高齢化に対して必要な手を打たなければ、社会が不安定化するのではないのでしょうか。

我が町の高齢者保健福祉計画は「支え合って暮らせる地域づくり」を理念として掲げています。先月号スタートした高齢者移動支援事業は、地域住民が互いに支え合って暮らせる地域づくりの一環として高齢者の閉じこもり・引きこもりの予防や社会参加を促すとともに、生活の不安の解消を狙ったものです。

## 弱者への対応

弱者への対応として「打ち明けやすく、周囲が手を差し伸べやすい環境の整備」のローガンを掲げましたが、この環境整備が福祉社会の建設において最も難しいものです。児童の虐待の問題を考えれば、容易に理解することができません。当事者が母親であれば、母親は子育てを上手くやらなくてはという観念に付きまわっています。子育てに自信がなければ他人に相談したいものの、相談すれば子育てが上手くできないことが明らかになってしまいます。他者の目におびえ、育児相談を意識的に避ける母親の存在が浮かび上がります。このような母親には、上手く子育てができない自分でも、誰かが助けてくれると信じられる環境がなければならぬのです。悩みや不安を打ち明けるには、周囲が手を差し伸べやすい環境であることが必要です。難しい問題ですが、来年度以降、専門家の助けを借りてこの問題に取り組みたいと思います。

## 震災対策について

橋の長寿命化のための診断は、震災対策として実施された事業ではありませんが、地震のために町内の河川にかかる橋が崩落したりすれば、警察や自衛隊の救援部隊の通行や救援物資の搬入などが難しくなる事態も考慮されますので、出来る限り早急に修繕などを施すために活用したいと考えています。長寿命化の診断は、大幡川にかかる大日橋、横手橋、大幡川幹線排水路第2号橋梁、東臨港橋、湯日川にかかる片岡橋、古川橋、東名高速道路にか

かる北原東橋、北原西橋、中原橋、前玉橋の10橋を対象に行われました。結果をみれば、緊急な対策を要するとの診断を下された橋はなかつたものの、けた・床版・下部工・支承・路面のいずれかに対策の検討を要すると診断された橋が10橋の内7橋、そして経過観察および維持による対処を要する

(鋼部材については再塗装を検討する)と診断された橋が10橋の内8橋ありました。取り掛かれるところから早急に処置したいと考えています。

上下水道はライフラインの確保のために必要不可欠のインフラです。まず、上下水道については、配水池などの施設の耐震化や飲料水の確保のための緊急遮断弁の設置、停電時に対応するための非常用発電機設備の整備をはじめ、石綿管などの耐震適合性に欠ける水道管の布設替えを逐次進め給水の確保を図っています。次いで、下水道については、地震で地盤の液状化が起り、マンホールが地上に浮上してしまうことがあるため、これを防止する措置を講ずるとともに、平成8年度以前の工事ではマンホールと下水道管をモルタルで固着していたために、地震の振動でひびが入って地下水や土砂が流入する恐れがあるため、継手部分に改良を加えて下水機能の維持を

## 町長からのメッセージ 94

# 我が町の明日のまちづくりについて…③

— 生活環境 —



## 先

月号でお話ししましたが、個人の立場から考えれば、命に関係する医療が確保され、生活を裏付けるお金が無理なくやり繰りされ、健康を維持する保健予防のネットが築かれ、地震や台風などの災害を免れればひとまず何とか生活することはできます。

地震や台風などが引き起こす災害事態への対処は、災害に強く、住民が安心して暮らせる「基盤整備」がスロウガンですが、東海地震への震災対策と、台風・ゲリラ豪雨への治水対策を敏速かつ強力に推し進めることに尽きるものと考えています。

震災対策は、発災以前の橋・上下水道などのインフラや建物などの耐震性の強化、事態対処の手續きのマニュアルの精密化と対処訓練の励行であり、治水対策は、治水計画の策定と中小河川の整備、強制排水施設の整備と住宅地の小河川の床版設置と考えています。

まず、震災対策の内容ですが、ハード面では橋の長寿命化のための診断、水道管の強化とつなぎ確保、下水道のマンホールの浮上防止、下水道管とマンホールのつなぎ確保、マンホール・トイレの整備、建物の耐震化、備蓄倉庫の建設と必要備品の確保などであり、ソフト面では地震発生以降に生じると予測される事態の更なる解明、対処マニュアルの整備、震災事態に対する包括的な対処訓練と個別的な対処訓練の励行などが挙げられます。

次いで、治水対策の内容ですが、中小河川の氾濫対策として北区の大窪川、川尻区の間屋川下水路、住吉区の稲荷川と住吉川の整備、榛南幹線に並行した新たな水路の開設、坂口谷川への水門開設、住宅地を流れる小河川への床版設置、満潮時と重なった場合の湯日川と坂口谷川の強制排水設備の据え付けなどが挙げられます。

図ります。

また、広域避難地に指定されている住吉小学校と吉田中学校にマンホールトイレを設置する予定であり、今後、下水道区域の拡大とともに広域避難地に指定されている所に設置したいと考えています。

さらに、地震に備えて耐震性のある本格的な備蓄倉庫を建設し、必要な物資をでき得る限り備蓄するように努めたいと思います。

また、ソフト面の震災対策ですが、発災後の事態を多面的かつ多角的に分析し、これまで以上に対処要領を事細かにマニュアル化するとともに、住民の皆さまはもろんのこと役場の職員にも身体で覚えてもらうように包括的な対処訓練と個別的な事態への対処訓練を工夫しながら繰り返していきたいと思っています。

## 治水対策について

台風やゲリラ豪雨による中小河川の氾濫は近年に

なつて以前に比べて多くなつたと受け止めておりますが、これには当町の人口が増加することに伴って都市化が進み、田畑が減っていることが大きな要因となつています。田畑の保水機能が下がり、河川に流れ込む雨水量が上がることで中小河川が以前に比べて相対的に排水能力が低下し、当町の平坦な地勢と相まって大幡川、湯日川、坂口谷川が満潮時と重なった場合に中小河川の氾濫が起きやすくなつています。

当町に降った雨水は川尻区の大幡川、問屋川下水路、住吉区の東側地域の稲荷川、西側地域の住吉川を経て、最終的に湯日川、坂口谷川に流れ込み、駿河湾に流れ出ていくようになっていきます。当町の河川の氾濫は北区の大窪川にも見られますが、地勢の特徴が原因となつて起きる河川の氾濫はこれら水路が湯日川、坂口谷川に流れ込む前の段階で起きています。河川の氾濫による被害を解消するた

め、まず、当町の全域における治水計画の策定を急ぐとともに、榛南幹線沿いに下水路と坂口谷川に水門を新たに開設して下流域の住吉区の西側における河川の氾濫を防ぐ措置を講ずるとともに、川尻区の間屋川下水路と住吉区の稲荷川の改修に取り掛かりたいと考えています。

台風やゲリラ豪雨によって住宅地の小河川が氾濫した場合、小河川と道路の境目が分からなくなり、住民が誤って河川に落ち、流されて行方不明となつたり、亡くなつたりすることが起こり得ます。このため、住吉区の学習ホールの南側の放水路に床版をかぶせる対策を取りましたが、これから計画的に住宅地の小河川の床版設置を進めたいと考えています。氾濫防止の最終的な対策は、強制排水機場の設置となりますが、費用の問題もありますので、中・長期的な課題と考えています。



町長からのメッセージ